

3 台湾美術の生みの親、塩月桃甫

関谷 ななみ

桃甫は、1921年(大正10)年の春に家族全員とともに台湾に渡った。

台北第一中学で美術の教師をしていた桃甫は、教師にも詰襟の制服があるのも関わらず茶色系統の洋服を着て、学校既定の軍事遊行にも参加しなかった。そのような点で間接的に軍国主義に反対を示していた。

渡台して僅か三か月後、桃甫は、かねてからの念願である太魯閣への先住民族探訪の旅に出かけた。

1925(大正14)年2月26日には洋画研究所「素壺社」を設立し、主にデッサンと油絵を教えていた。その当時、桃甫は台北高等学校で美術の教師をしていた。

桃甫は、25年間原住民族を描き続けた。中間色を背景に力強く大胆な筆遣いで、原色の迫力ある色彩をキャンバスに弾ませて、情熱と詩心の溢れた作品を作り上げた。台湾で桃甫が描いた作品を一つ紹介する。

『母』油絵 1932(昭和7)年 →

桃甫の絵画に寄せる情熱は、児童絵画をはじめとする美術教育にも向けられるようになり、台湾の文化の育成と振興に注がれていた。



61 鹽月桃甫 母 1932 第六回台展・西洋畫60

しかし、1935(昭和10)年に、台湾人の画家たちが台陽美術展を組織して官展に反対の旗揚げをした。台展の台湾画家達は、桃甫が台陽展の画家たちの官展審査委員資格を取り消したことをきっかけに桃甫を恨むようになったのだ。

また戦後、日治時代官展、台陽展に出品していた老画家達から「桃甫は威張っていた」と噂された。

謝里法は、『藝術家』という雑誌で桃甫のことをこう述べている。

塩月桃甫は台湾人に対して極度に偏見のある日本人で十分に日本島国民の性格を有し、自ら神から来た日本国民であると認め、植民地台湾にきてその特殊な地位と職種は一層の高貴感をかもし出して、塩月の傲慢は遂に台湾の群衆を失ってしまった。(注・1)

だが、謝里法の言葉に対し、桃甫の教え子である許武勇は、「桃甫の主帝する官展の入選・賞の選定には差別待遇などなく、当時、中学の入学試験にも差別待遇があった時代に官展の公平性は非常にあり得ない」と論じている。

塩月桃甫は台湾の美術の発展に半生を捧げ、生涯、自己の信念と芸術を貫き通した画家であった。

引用文献

宮崎県立美術館・上田雄二編集『一情熱・愛・詩情—塩月桃甫展』, 2001年, P25

参考文献

楊 孟哲著『日本統治時代の台湾美術』同時代社, 2006年, P228

森美根子著『台湾を描いた画家たち 日本統治時代 画人列伝』, 株式会社産経新聞出版, 2010年. P179

宮崎県立美術館・上田雄二編集『一情熱・愛・詩情—塩月桃甫展』, 2001年, P22-26, 35

註

太魯閣/…「蕃語」で「つらなる山の峯」という意味。標高 500 から 1000m の山岳地帯に大霸尖山の巨岩から生まれたと言われるタイヤル族が住んでいた。

謝里法…1938(昭和 13)年生まれ。フランス及びアメリカ留学の戦後派の画家・美術評論家

許武勇…1920(大正 9)年生まれ。内科開業医・画家